

きのこ・かび 関連図書の紹介

吹春 俊光

2010年は、きのこ愛、がテーマの本が数おおくみられました。図鑑的な名前づけについての愛もあれば、きのこの全人格への愛、きのこ文学への愛など、さまざまな愛のかたち。それぞれを刊行順に紹介します。

「新潟県のきのこ」

監修：宮内信之助，著者：新潟きのこ同好会，発行所：新潟日報事業社，2010年6月20日発行，159頁，2100円（税込）

新潟県には約1450種の野生きのこが産するという。そのうち食・毒・大型、そして珍菌を選んで260種を掲載したのが本書という。なるほど、冒頭からケモノヒラタケという種が登場する。そして宮内信之助さんのご専門であるフウセンタケ属は、何と48種が取り上げられている。わたしは不勉強で、全部聞いたことがない和名ばかりですが、ナツノカワムラフウセンタケ、ブナフウセンタケという種類、そして宮内さんの命名によるコシノウスムラサキフウセンタケ、ヤマブキフウセンタケ、オオトガリコゲチャフウセンタケ、カラムラアブラシメジ、ムラサキズボタケ、キツネフウセンタケという種が写真で紹介されている。その他にも、初めて聞く和名をひろってみると、タカネキヌメリガサ、モリノハダイロガサ、スナジアカヤマタケ、シロムラサキシメジ、カキシメジモドキ、オオカキシメジ、マツバラシメジ、カマドシメジ、カップツルタケ、コガネクリタケ、キイロツチスギタケ、コガネツムタケ、ウメハルシメジ、キアミアシヤマドリ、ニオイシロハツ、キツネハツ、ウコンクサハツ、コクサハツ、ススケドクベニタケ、ブナベニタケ等々（私が知らない名のきのこはもっと掲載されています）。新潟には他の地域ではみられないような種が沢山あるのでしょうか。そして、このような情報が広く共有されるまでには、いろいろな意味で、まだ時間がかかるのかもしれませんが。巻末には、本場ドクササコ、カエンタケなどの毒きのこの情報が掲載されており、特にドクササコのところ等は他の一般書では読めない情報が掲載されています。



「きのこる キノコ LOVE111」

著者：堀博美，出版社：山と溪谷社，2010年6月21日，18.1 x 13.2cm，232頁，ISBN：978-4-635-33051-0，1680円（税込）

ああ、これは「きのこ愛」というものがあるとすれば、その気持が結晶したような本です。冒頭に「使用上の注意」という項目を設け、本書が実用にはまったくならないことが述べてあります。続く111のエッセイ、その冒頭に「きのこる」という不思議なことばの説明があります。すなわち、「きのこに習い、きのこの的に生きること」なのだそうです。きのこにもっと光をあて、きのこの生き方にもっと学ぶべきではないか、と。きのこエバンジェリスト宣言ですね。役にたたないといひながら、よみすすめるうちに相当なきのこ通になる学習内容がもりだくさん。特にアート系の情報は私には新鮮でした。きのこが好きで、しかしだれにも告白できないような人、そんな人には、つよい味方になってくれるでしょう。そして、きのこの本は多いけど、どれも私を満足させてくれないわ、というような方々、是非、手にとってみてください。



「大分と九州のきのこ」

編集：大分きのこ会，印刷・発行：佐伯印刷株式会社，2010年7月1日発行，86頁，1700円（税込）

大分きのこ会30周年の記念出版。著者は大分きのこ会元会長の遠藤正喜、現会長の村上康明さん他、多数の大分きのこ会の会員の方々である。遠藤さんは1972年の生態学会誌にシイ・カシ林の大型菌の生態論文を、村上さんは1987年に英国菌学会会誌などに、シイ・カシ林の生態研究論文を発表され、両者ともに当時のきのこ生態研究・論文のお手本であった。村上さんはスイスのローザンヌ大学のクレマンソン先生のもとでハラタケの分類も勉強され、ローザンヌ大学で学位を取得された本格的な学者さんである（あの Jean-Marc Moncalvo と机を並べていた！）。薄いように思う本書だが、カブラマツタケ属の超珍菌未知種ブンゴツボマツタケ、ハマクサギタマゴタケなどめずらしい写真、シブイロスギタケ、チャナバ、コガネショウロタケ、ブンゴシワカラカサタケなどあまり聞いたことのないような種類、また現在ではほとんどみられなくなったイネ科のササに菌根をつくるササナバの生態写真（ササの背丈が高くなっている！）などが写真で紹介されている、びっくり仰天の内容の濃い図鑑である。地下生菌にもかなりのページがさかれており、ニカワショウロ近縁種、*Tuber*属の未知種複数、イグチ類の地下生菌 *Chamonixia* 属、*Alpova* 属の未知種、イッポンシメジ類の

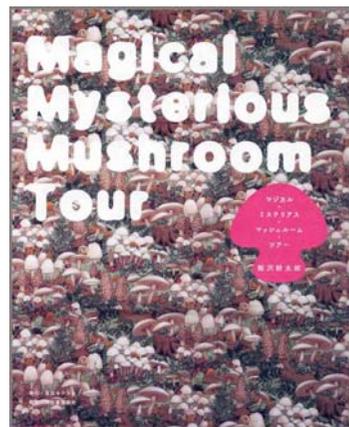


地下生菌 Richoniella の未知種、チチタケ類の地下生菌チチシ
ョウロ属の未知種などが孢子や子実体の写真付で紹介されてい
る。そして九州の分布図入りケシボウズタケ3種の紹介。発光
性のきのこもふんだんに写真で紹介されている。大分はブナ林
から照葉樹林まで様々な植生がみられるため多様なきのこがみ
られるのだ。うらやましい。入手されたい方は、会長である村
上康明さんに直接申し込み。メール leuco7@oct-net.ne.jp ま
で。

「マジカル・ミステリアス・マッシュルーム・ツアー」

著者：飯沢耕太郎，出版社：東京キララ社，2010年7月31日
発行，18×15cm，157頁，ISBN：978-4-309-90879-3，1680円
(税込)

会誌25号で紹介した「きのこ文学大全」の著者であり、著名
な写真評論家の著者は、ますますきのこの深みにはまってしま
ったらしい。本書の最初のほうには、きのこが登場する絵本、
各種アリス本のなかのきのこなどが紹介され、つぎに、沢山の
きのこ切手ときのこグッズなどが続く。このきのこグッズの
材料提供は本会の会員北川公子さんである。また千葉県立中央
博物館のきのこ関係稀観本も「ベニテングタケの王国」として
登場。途中に小説がはさまり、最後に R. G. ワッソンの雑誌ライ
フに掲載された“Seeking the magic mushroom” (1957年) の翻
訳が掲載されている。幻覚きのこ文化に興味のあるひとは、是
是非よんでほしい。ライフの記事はウェブ上に全文が公開され
ているので、このタイトルで検索して是非みてください。カラ
ーの写真付でみることができます。



「まつたけ山“復活させ隊”の仲間たち」

著者：吉村文彦・まつたけ十字軍運動，出版社：高文研，2010
年8月18日発行，B6，182頁，ISBN：978-4-87498-446-8，1680
円(税込)

金塊を買ったり温泉を掘ったりしたところもあったという竹
下内閣のふるさと創生資金。岩手県岩泉町は、その資金で世界
唯一の「まつたけ研究所」を創設しマツタケの増産をはかった。
今や岩手や岩泉はマツタケのブランドである。その研究所で
1990年から15年間、所長であったのが本書の著者である。退職
されたあと、郷里の京都で、学生時代の研究のふるさととなっ
た京都市岩倉の地で、マツタケ山・里山再生にとりくまれ、そ
の経緯を紹介した本。マツタケの生物学や里山の紹介など自然
科学の紹介をふまえて、荒れたマツ山にとりくんだ熟年チーム



の約5年間の記録。大変興味深い。読み終わって思うこと。1961年の丸太の輸入完全自由化が日本の林業の衰退と山の荒廃をうみだし、その結果日本各地の山が荒れ放題の結果となったのだという。それでは、現在進行する農産物の自由化のあとには、やはり日本の田畑の荒廃が続くのだろうか。と、マツタケに象徴される日本の林業の、そのあとの農業のことを、つい思ってしまいました。

「キノコの魅力と不思議」 見た目の特徴・発生時期・場所から食感・毒の有無・中毒症状まで

著者：小宮山勝司，出版社：ソフトバンククリエイティブ（サイエンス・アイ新書），2010年9月18日発行，208頁，ISBN-978-4-7973-4716-6，1000円（税込）

著者は長野県須坂市でペンションを経営するご宿のオーナー。そのご主人が、見開き頁に1種えらんできのこ談義をしてくれる本。秋の夜長にきのこ鍋をつつきながら、延々ときのご談義を聞いているような、しあわせな気持になる1冊。きのこ初心者というより、ひととおりの図鑑はもっているけど、という人むき。小宮山さんの文章、けっこうよませます。本書をよんだあとは、是非、長野市内からけっこう近い場所にある、ペンションきのこ、に泊まりにいらしてみてください。美味しい野生きのことともに、もっと違った話がきけることでしょう。



「おいしいきのこ毒きのこ」

著者：大作晃一・吹春俊光，出版社：主婦の友社，2010年9月30日発行，192頁，ISBN：978-4-07-273560-2B6，1470円（税込）

本書の特色のひとつは、大作さんの懇切丁寧な、美しくわかりやすい写真である。大きな声ではいえませんが、本来ならば、大作さんが、山溪の弁当箱図鑑「日本のきのこ」に続く図鑑のために撮りためた数多くの白背景写真のなかから、よりすぐりの写真を選び、日本できのこ狩りをするには、押さえておいたほうがよい食・毒きのこについて、それぞれの種類の見分け方を、明快な写真をとおしてわかりやすく紹介した本です。もうひとつの隠された特徴は、《本書を信じてきのこをたべて、まんがいち中毒になっても、本書は責任をとりません》宣言が、冒頭に掲げられていることでしょう。おそらく日本初。この背景にあるのは、最近頻発している、図鑑の読者からの、きのこ図鑑執筆筆者へのクレーム電話事件です。曰く「工業製品には製造者責任があるのに、図鑑にないのはけしからん」「いろいろ図鑑をな



らべて比較すると、同種の紹介なのに写真がそれぞれちがっていて同じ種類とは思えないものばかりで、けしからん」「国などの公的研究機関に所属する研究者は、もっと完璧な図鑑づくりに邁進すべきであり、いかげんな図鑑（その方の表現をかりれば）が蔓延する現状を放置するのは怠慢でありけしからん」などというものです。そのような背景をもとに《本書を信じて責任とりません》宣言が掲げてあります。まあ、それにしても、大作さんのすぐれた写真がこの値段で手にはいるので、お買い得です。

「キノコ・カビの研究史 — 人が菌類を知るまで」

著者：G・C・エインズワース／小川眞（訳）、出版社：京都大学学術出版会、2010年10月20日発行、A5版、418頁、ISBN：978-4-87698-935-5、4200円（税込）

本書は1976年に出版された、Ainsworth, G.C. 「Introduction to the History of Mycology」(Cambridge Univ. Press) の翻訳。この本は博物館職員としての私にとって、西洋の古書を紹介するための必須の文献だった。巻末の文献目録、著者・項目のインデックスがものすごくよくできていたのである。しかし、古い本の情報が本書の本質ではない。いわば《人類の菌類認識史》の本なのである。ギリシャ・ローマ時代にどんなきのこが愛好されていたか、胞子を世界ではじめて見たのは誰であるか等、菌類をとりまくありとあらゆる話題が、文献にそって歴史をたどりながら詳細に紹介されていく。本書を手に取り、日頃つきあいの深い「きのこ」をもういちどふりかえてみるのもよい。オリジナルも翻訳も労作。情報量と内容を考えると非常に安価で、本会の会員必携の文献。

翻訳の小川眞先生は、「炭と菌根でよみがえる松」、「森とカビ・キノコ、樹木の枯死と土壌の変化」のほか、訳書として「不思議な生き物カビ・キノコ-菌学入門」、「チョコレートを滅ぼしたカビ・キノコの話 植物病理学入門」（全て、築地書館）などを、最近たてつけに出しておられます。どれも名著、とても勉強にもなり面白いので、是非手にとってください。

「きのこ文学名作選」

編者：飯沢耕太郎、出版社：港の人、2010年11月27日発行、B6、182頁、ISBN：978-4-87498-446-8、1680円（税込）

「書肆くさびら堂主人」をなめる編者は「書棚のきのこ狩り」と称し、今昔物語から現代まで、物語の中に印象深くきのこが登場する日本文学16編を選び、1冊（のカゴ、でしょうかね）



にあつめた。それが本書である。手にとって思うのは、まず本書の装丁がユニーク。表紙に穴があいている。次々に登場する物語に応じて、紙の質、活字、活字の色や大きさ、レイアウトがどんどんかわる。真っ黒な頁が続いたり、ほとんど文字がよめへんで一、というところもある（よむんだけだね）。あつめられた物語の内容は、まあ読んでみて下さい。知り合いが感想をメールで送ってきてくれました。「それにしても何と多くの作家達がきのこをマイナーなものとして捉え、負のモチーフとして使っていることか。一般の方々はきのこは得体の知れないもの、危険なものという暗いイメージを持っているのですねえ。きのこを愛するわたくしとしては残念でなりません。」だそうです。野外できのこ狩りをする人達のきのこ観というより、書齋の中の文学者達がきのこをどのようなイメージでとらえてきたか、ということでしょうか。編者の飯沢さんは、これで満足かとおもいきや「・・・それが途方もない広がりとおもいきや、深みを持つものであることが次第にみえてきた・・・」、そして、「外国のきのこ文学の名作を含む続編の刊行も考えている」だそうです。きのこ愛のあり方も様々なものだ、と感心してしまいます。

「IFO 微生物学概論」

監修：発酵研究所，編集：大嶋泰治・駒形和男・杉山純多・荒井基夫・本田武司・中瀬崇・宮道慎二，出版社：培風館，2010年12月22日，543頁，ISBN：978-4-563-07811-9，4935円（税込）

本書の監修となっている（財）発酵研究所は、1944年に設立され、武田製薬のもとで有用微生物の収集・保存・分譲をつづけてきた日本が誇る国際的な菌株保存の機関である。現在では（独）製品評価技術基盤機構（NITE）のバイオテクノロジー本部生物遺伝資源部門（NBRC）にすべてが移管され、さらに充実した活動をおこない、NBRCを舞台に著名な研究者の方々が華々しく活動されておられることは、皆さん周知のことである。そしてこの財団は、お金もちであり、その財力をいかして微生物研究を支える活動を数多くおこなっている。本書は、その一環として企画されたもので、手に取ると丁寧な造本でハードカバーでありながら、非常に安価な価格設定になっていることから、その財力の一部がうかがい知れる。そして、前書きをよむと「一微生物に関心をもつ優秀な学生を育てることが肝要である。しかし、日本語で書かれた適切な微生物入門教科書がない」とう理念がうたわれている。すなわち、戦後日本の微生物学を牽引してきた研究所がつくった、本気の教科書であること

がわかる。内容はウイルス、細菌、菌類と、いわゆる微生物全

般をあつかう教科書であり、章立ては、微生物の発見、という序論からはじまり、微生物の操作・観察・保存、生理・遺伝・各分類群の各論と、おもいつくようなことは全てあつかわれている。地球環境と微生物、ヒトと微生物、微生物の利用、という項目目である。内容をみても、お買い得だと思います。

